

羅生門

芥川龍之介

青空文庫

或日あるひの暮方くわの事である。一人の下人が、羅生門らしやうもんの下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外ほかに誰もゐない。唯、所々丹塗にぬりの剥げた、大きな圓柱まるばしらに、蟋蟀きりぎりすが一匹とまつてゐる。羅生門らしやうもんが、朱雀大路すじやくおおぢにある以上いじやうは、この男の外ほかにも、雨あめやみをする市女笠いちめがさや揉烏帽子もみかぶとが、もう二三人にんはありさうなものである。それが、この男おとこの外ほかには誰もゐない。

何故なぜかと云ふと、この二三年、京都には、地震ぢしんとか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災わざはひがつゞいて起つた。そこで洛中らくちゆうのさびれ方は一通りでない。舊記によると、佛像や佛具ぶつぐを打碎うちくだいて、その丹にがついたり、金銀の箔はくがついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪たきぎの料しゆうに賣つてゐたと云ふ事である。洛中らくちゆうがその始末であるから、羅生門の修理しゆりなどは、元より誰も捨て、顧かへりみる者がなかつた。するとその荒あれ果はてたのをよい事にして、狐狸こりが棲すむ。盗人ぬすびとが棲む。とうとうしまひには、引取り手ひきとりてのない死人を、この門へ持つて来て、棄すて、行くと云ふ習しゆくわん慣かんさへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味きみを悪わるるがつて、この門の近所きんじよへは足あしぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉からすが何處どこからか、たくさん集つて來た。書間ひるまみ見ると、その鴉からすが何羽なんぼとなく輪

を描いて高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。——尤も今日は、刻限が遅いせい、一羽も見えない。唯、所々、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはへた石段の上に、鴉の糞が、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頬に出來た、大きな面砲を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐるのである。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は、雨がやんでも格別どうしようかと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年、使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、この衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模様も少からずこの平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そ

こで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして——云はゞどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐた。

雨は、羅生門をつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した藁先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる違はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう

火桶ひけが欲しい程の寒さである。風は門の柱はしらと柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまつてゐた蟋蟀きりぎりすも、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫かきみに重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風あめかぜの患あはのない、人目にかゝる惧おそのない、一晚ばんごく樂たかにねられさうな所があれ、そこでともかくも、夜よを明あかさうと思つたからである。すると、幸門の上の樓ろうへ上る幅の廣い、之も丹を塗つた梯子はしごが眼まなこについた。上うへなら、人がゐたにしても、どうせ死人しにんばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖柄ひぢりづかの太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履わらざうりをはいた足を、その梯子の一番ばん下の段へふみかけた。

それから、何なん分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅はばの廣い梯子の中段に、一人の男が、猫ねこのやうに身をちぢめて、息いきを殺しながら、上の容よう子を窺うかがつてゐた。樓の上からさす火の光ひかりが、かすかに、その男の右の頬ほをぬらしてゐる。短い鬚ひげの中に、赤く膿うみを持つた面砲にきびのある頬である。下人は、始めから、この上にある者は、死人しにんばかりだと高を括くくつてゐた。それが、梯子はしごを二三段上つて見ると、上では誰か火ひをとぼして、しかもその火ひを其處そこ此處こと動うごかしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄わういろい光ひかりが、隅すみ々々に蜘蛛くまの巣すをかけた天井裏てんじやうらに、ゆれながら映うつつたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜

に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出来る丈、平にしながら、頸を出来る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの屍骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狭いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の屍骸と、着物を着た屍骸とがあると云ふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その屍骸は皆、それが、管、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりしてごろごろ床の上にごろごつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唾の如く黙つていた。

下人は、それらの屍骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、殆悉この男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめ、其屍骸の中に蹲っている人間を見た。檜肌色の着物を著た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その屍骸の一つの顔を覗きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の屍骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた屍骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づつ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本づつ抜けるのに従つて下人の心からは、恐怖が少しづつ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對するはげしい憎悪が、少しづつ動いて來た。

——いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを増して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、餓死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であらう。それほど、この男の惡

を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片つけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる悪であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣でゐた事などは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大腿に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは、云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が屍骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は屍骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそ

こへね ぢ倒たほした。丁度、鶏とりの脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。さあ何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆らうばをつき放すと、いきなり、太刀たちの鞘さやを拂つて、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。兩手りやうてをわなわなふるはせて、肩しうねで息いきを切りながら、眼がんきうを、眼球まぶたが眶まぶたの外へ出さうになる程、見開いて、唾つばのやうに執拗しうねく黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白はじにこの老婆の生死せいじが、全然、自分の意志いしに支配しされてゐると云ふ事を意識いしきした。さうして、この意識は、今まではげしく燃えてゐた憎惡ぞうおの心を何時いつの間にか冷さましてしまつた。後に残あとつたのは、唯ただ、或仕事あるしごとをして、それが圓満ゑんまんに成就じゆうじゆした時の、安らかな得意とくいと満足まんぞくとがあるばかりである。そこで、下人は、老婆らうばを見下しながら、少し聲こゑを柔やほらげてかう云つた。

「己は檢非違使けびゐしの廳ていの役人やくにんなどではない。今し方この門もんの下とほを通とほりかゝつた旅たびの者だ。だからお前に繩なわをかけて、どうしようなと云ふやうな事はない。唯ただ、今時分、この門もんの上で、何なにをして居たのだから、それを己おれに話はなししさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開みひらいてゐた眼めを、一層そうおほ大きくして、ぢつとその下人かほの顔かほを見守つた。眶しほの赤あかくなつた、肉食鳥にくじのやうな、鋭するとい眼めで見たのである。それから、皺しほで、殆たいてい、鼻

と一つになつた唇を、何か物でも嚙かんでゐるやうに動かした。細い喉のどで、尖つた喉ほとけ佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉のどから、鴉からすの啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳みみへ傳はつて來た。

「この髪を抜いてな、この女の髪を抜いてな、鬢かつらにせうと思つたのぢや。」

下人は、老婆の答こたへが存外、平へい凡ぼんなのに失望した。さうして失しつ望ぼうすると同時に、又前の憎惡にくしみが、冷な侮蔑ぶべつと一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色けしきが、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手かたてに、まだ屍骸しかいの頭から奪とつた長い抜け毛もを持つたなり、墓ひきのつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

成程、死人の髪かみの毛けを抜くと云ふ事は、悪い事かも知れぬ。しかし、かう云ふ死人の多くは、皆、その位ことな事を、されてもいゝ人間にんげんばかりである。現に、自分が今、髪かみを抜いた女などは、蛇へびを四寸ばかりづゝに切きつて干したのを、干魚ほしうをだと云つて、太刀帶たてはきの陣へ賣りに行つた。疫病にかゝつて死ななかつたなら、今でも賣りに行つてゐたかもしれない。しかも、この女の賣をんなる干魚あぢは、味あぢがよいと云ふので、太刀帶たちが、缺かさず菜料さいれうに買つてゐたのである。自分は、この女のした事が悪いわるとは思はない。しななければ、饑死うゑじにをするので、仕方しかたがなくした事だからである。だから、又今、自分じぶんのしてゐた事も悪い事と

は思はない。これもやはりしなければ、餓死をするので、仕方がなくする事だからである。さうして、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、自分のする事を許してくれるのにちがひないと思ふからである。——老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面砲を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき、門の下でこの男に缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつき、この門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆ど考へる事さへ出來ない程意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に、右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、かう云つた。

「では、己が引剥をしようと思つまいな。己もさうしなければ、餓死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜肌色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、屍骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盜を働きに急いでゐた。

——四年九月——

青空文庫情報

底本：「新選 名著復刻全集 近代文学館 芥川龍之介著 羅生門 阿蘭陀書房版」ほるぷ出版

1976（昭和51）年4月1日発行

※疑問点の確認にあたっては、「日本の文学33 羅生門」ほるぷ出版、1984（昭和59）年8月1日初版第1刷発行を参照しました。

入力：j:utyama

校正：もりみつじゅんじ、野口英司

1999年6月9日公開

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

羅生門

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>